

## ママとの温泉旅行

温泉の癒しと温泉街の景色を楽しむというコンセプトが  
部屋でママとひたすらセックスをするという  
コンセプトに大変更

今日は待ちに待ったママとの温泉旅行。

1週間前に急遽計画した突飛な旅行だけど、この1週間は心が弾んで眠れなかったんだ。

「あと少しで到着ね、見て！もう味のある温泉街の雰囲気が出てきたわよ」

3両編成の車両の窓を眺めながらママがつぶやく。

「ほんとだっ！！温泉温泉！！楽しみだなっ！！」

列車が緩やかな速度に変わる。

列車は無人駅に到着した。

「ここが…温泉の街…やったっ！！到着したぞおお！！」

「嬉しいわねっ！！きゃははっ！！」

生い茂る夏直前の緑を眺め、しばし歩いて20分。  
僕たちは旅館に到着した。

「良いところだね、リラックスできそうだわっ！」

「ほんとだぁっ！」

受付でチェックインを済ます。

広々としたエントランスと古い和風の館内のたたずまいが妙に不釣合いのように思えた。

部屋へと向かう。

僕は少しめくれたパンツの裾を直すために腰をかがめた。

肩を並べて歩いていた僕たちが、少し斜めにずれる。

腰を上げるとママは早く部屋へ行きたいといった感じで歩いている。

後ろからママの長い髪と丸みを帯びた肩が見える。

この日だけいつもよりずっと色っぽかったのは…。

“……………”

ううん、関係ないはずだ。

僕は首を横に振った。

だって、僕たちはただ温泉の癒しの温もりとのどかな田舎の空気を楽しみにやって来たただけなのだから……。

「んはあっ！！もっとお！もっともっと！んああ！！もっとオチンポぶちこんでえ！」

真っ白い音を立てて、汗ばむ肌がぶつかり合う。

「あくああああ！！ママの中っ！！汁だくでニユルニユルで！僕のペニスを締め付けて…くるよお！！んくはあ！」

まだ明るい空の日差しが、大きなガラス戸の向こうに照りつけている。

夏の夕方は、時計の短針が4の字を過ぎてもまだ明るい。

「だめえ！！駄目なのお！！すごいつ！！んあああああはああああ！！すごすぎるのお！！」

ぶっといウィンナーのように膨張し、釣り上げられたての新鮮な魚のようにピチピチとお腹に向けて跳ね回る僕のペニス。

斜め急角度に勃起しているのを無理やりにずり下げて、自分の胴体から見て丁度90度の角度に設定してやり、そしてママのオマンコにぶち込む。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと幸いです。